

秦馬の実像

菊地 大樹
(総合研究大学院大学・蘭州大学)

はじめに

秦の勃興に馬が深くかかわっていたことは、『史記』秦本紀に知ることができる。犬丘(現在の扶風)にいた非子は馬を好み飼養技術に長けていたことから、周の孝王は非子に渭河と汧水が合流する地域(現在の宝鸡)で馬を飼育させ大いに繁殖したとされ、その功績から非子は秦の地(現在の天水)を与えられた。その後、秦は群雄割拠の春秋戦国時代を駆け抜け、遂に東方六国の統合を果たす。その原動力の中心には、秦始皇陵兵馬俑坑に代表されるように巨大な軍隊が安定的な馬匹生産体制に支えながら組織され、馬の能力や適性を熟知した管理、運用が執り行われていたことが、歴史学や考古学の成果から明らかとなってきた。近年は、考古科学分野の著しい進展から新たな歴史像を提示できるようになっており、そうした新知見を援用することで、秦を支えた馬の実像に迫る。

1. 考古科学からみる秦馬の特徴

『周礼』夏官職方氏には、雍州(主に現在の陝西・甘粛一帯)は馬匹生産に適していた地であると記されている。近年、古代DNA分析が進められ、陝西省淳化县棗樹溝遺跡(西周)からは、中央アジア地域に特有の系譜をもつ馬が確認されるなど、当時からすでに西方との往来が盛んであった可能性が示唆されている。秦にかんしては、鳳翔県秦公一号大墓(春秋後期)、同県血池遺跡(戦国)や甘粛省礼県西山遺跡(周)の分析結果から、草原地帯を介した活発な東西交流が窺え、在地のみならず周辺地域を出自とする馬の供給実態がSr同位体分析からも導かれている。古代DNA分析では、系統のほか毛色といった身体的特徴の解析も進められ、秦の馬は、騮(bay)、栗(chestnut)または黒(black)色が主体であったようで、そのことは、同時代の馬意匠にみられる毛色とも符合する。また、血池遺跡で犠牲となっていた仔馬からは小型馬の因子が確認されるなど、秦ではさまざまな馬を利用していたことがわかる。

2. 戦国秦の馬

2014年、西安咸陽国際空港の整備事業にともない発掘された閻家寨遺跡からは、墓や建築遺構のほか、100基を超す祭祀坑群が見つかった(陝西省考古研究院2018)。出土遺物から、遺跡年代は戦国時代中後期と推定され、遺跡の南側には秦恵文王の子である武王

の永陵に比定される司家荘秦陵が位置していることから、祭祀坑群は永陵に属すると考えられている。

東西に整然と配置された祭祀坑群は、堅穴土坑に馬が1個体ずつ埋葬され副葬品を伴わない。33基の祭祀坑から取り上げられた馬の年齢と性別の構成をみると、オスの若齢馬が大部分を占め、推定体高は125～151cmであり、そのほとんどが134cm以上であった。

3. 秦始皇帝陵兵馬俑坑の馬俑と銅車馬

秦始皇帝陵兵馬俑坑からは、これまで大量の兵士俑とともに600体ほどの馬俑が出土している。一号兵馬俑坑の隊列に編制された戦車の馬俑(n=17)は平均体高131.7cm(陝西省考古研究所ほか1988、2009～2011年の同坑北部T23G9より出土した騮色(栗毛)の馬俑は、未修復ながら体高124～137.6cmと推定される(秦始皇帝陵博物院2018)。

二号兵馬俑坑からは、革製と思われるクッション性のある軽量鞍をつけた騎馬俑が出土しており、体高は133cmであった(袁2014、図1)。このほか三号兵馬俑坑では、実物の二分の一サイズとされる銅車馬が出土している(図2、3)。一、二号銅馬の体高は65.2～66.8cmであり、一号兵馬俑坑や他の遺跡より出土した実際の馬車規格と比較すると、主要部分の規格は銅車馬のおよそ二倍であることから、推定復元された体高は130.4～133.6cmとなる。

4. 秦始皇帝陵の馬

秦始皇帝陵からは、馬俑のほか実際の馬も出土している。秦始皇帝陵東の上焦村一帯では、南北に連なる馬厩坑群が発見された。堅穴の馬厩坑からは、馬の世話を職掌とする圉人とともに推定体高140～150cmの馬が1頭ずつ配されており、出土した陶製の盆や鉢には、「中厩」「左厩」「宮厩」「三厩」といった官厩名が確認される(秦俑坑考古隊1980)。

2000年に陵園の内城南西で発見されたK0006は、平面が中字形を呈する陪葬坑である(図4)。後室の東部と西部より20個体ほどの馬骨が発見されているが、雨水の流入などで攪乱されており原位置を留めていない(陝西省考古研究所ほか2006)。陪葬坑を覆う棚木や埋土の崩落で馬骨のほとんどは破損が著しいが、性別判定できた個体はすべてオス、関節部の癒合状態や臼歯の咬耗度から、埋葬馬の推定年齢は10歳以上であるという。また、計測値の比率から兵馬俑坑の馬俑に酷似しているという。部分的に報告されている肢骨の計測値から埋葬馬の体高を推定したところ、115～154cmと幅をもつ結果となった。このことから、K0006の埋葬馬は画一的な大きさではなく、小型馬から大型馬がいた可能性がある。

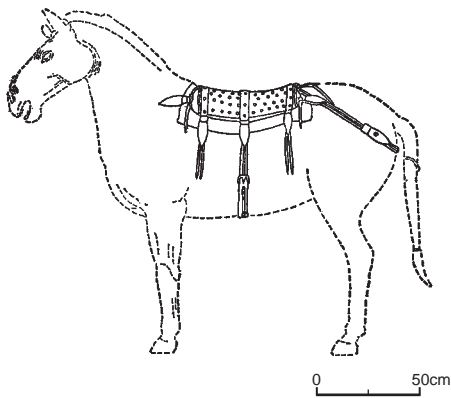


图1 秦始皇帝陵二号兵馬俑陪葬坑騎馬俑

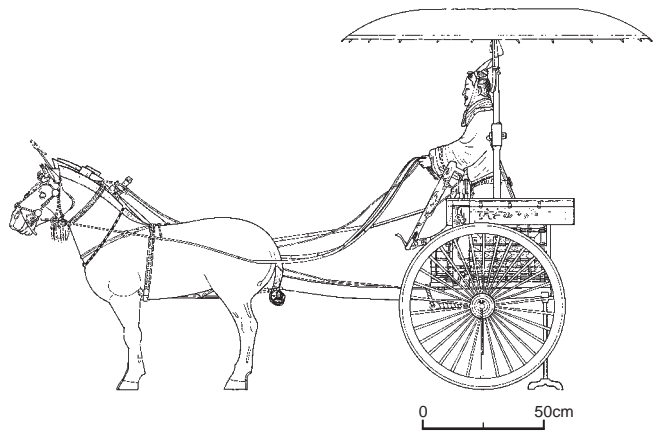


图2 秦始皇帝陵三号兵馬俑陪葬坑一号銅車馬

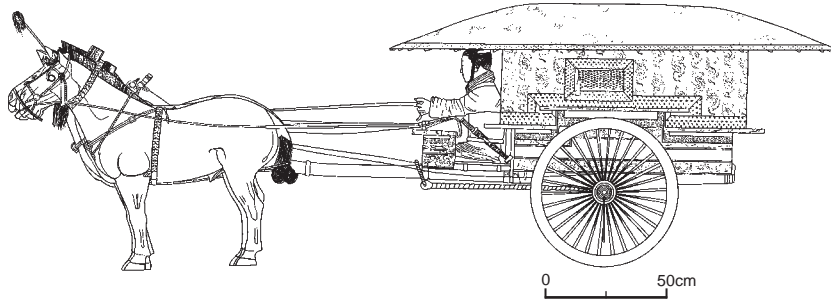


图3 秦始皇帝陵三号兵馬俑陪葬坑二号銅車馬

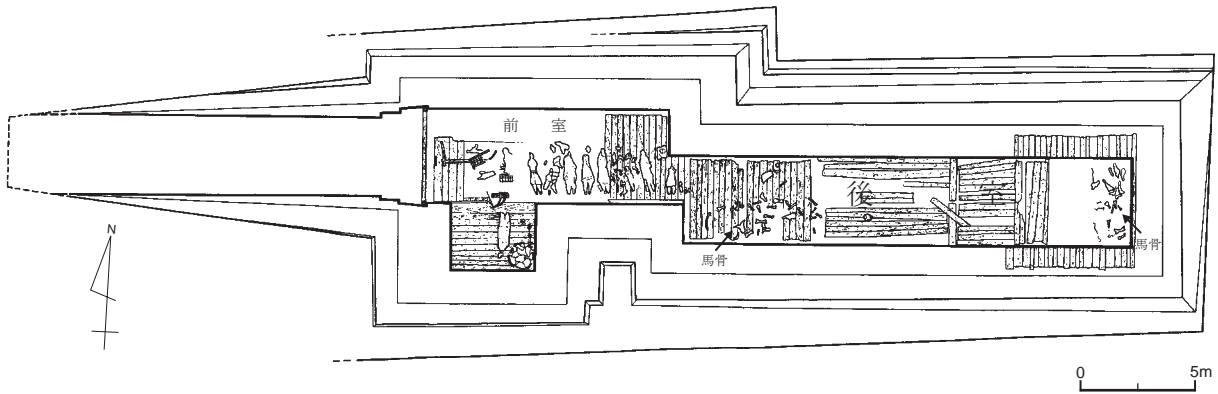


图4 秦始皇帝陵二号兵馬俑陪葬坑騎馬俑

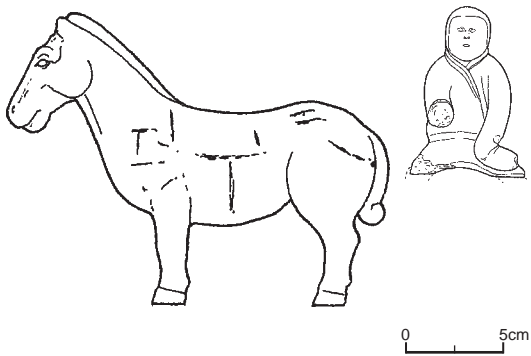


图5 茅坡郵電学院南区秦墓 M123 出土馬俑と騎馬俑

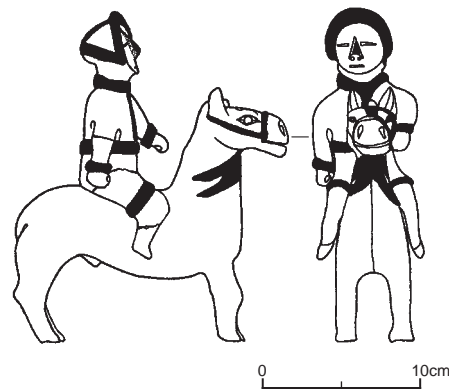


图6 塔兒坡秦墓騎馬俑 M28057 : 6

おわりに

秦が興った地は、新石器時代より草原地帯を介して西方の文化をいち早く受容できた。この地を起点とした東西交流史の幕開けは、これまで前漢武帝期に大宛国よりもたらされたとされる汗血馬に代表されてきたが、近年の研究成果からその時期が遡る可能性が示唆されている。そして、秦がこのような地の利を活かして馬匹生産体制を組織しており、軍馬に要求される規定が戦国秦の時期にはすでに確立していた可能性が閻家寨遺跡の分析から導き出されている。

雲夢睡虎地秦簡の「秦律雜抄」には、軍馬の選定条件に五尺八寸以上の体高が要求されており（睡虎地秦墓竹簡整理小組 1990）、当時の秦尺はおよそ 23cm であることから、軍馬に必要とされる馬体高は 133.4cm 以上となる。また、岳麓書院蔵秦簡の「金布律」には、使役馬に性差問わず五尺五寸（126.5cm）以上の体高を要求しており、そこには 4 歳以上という年齢制限も課されている（「秦代出土文字史料の研究」班 2018）。閻家寨遺跡の馬は、およそこの規定を満たしており、続く兵馬俑坑の馬俑は、まさに理想の軍馬像を表現したものであった。4 歳以上という年齢は、乳歯から永久歯に生え変わり、関節部も成長しきる時期であることから、秦が如何に馬の生態を熟知して規定を設けていたかがわかる。ただし、当時はこうした理想的な馬ばかりでなかったことは、戦国秦から統一秦にみる多様な馬意匠や（図 5、6）、『周礼』夏官校人にみる良馬以外の飼養管理体制からも強く想定される。当時は、戦乱の世のなかで軍馬の利用形態が車馬から騎馬へと転換する時期でもある。その変革に適応するため、馬を熟知していた秦では、多種多様な馬の適性に合わせて巧みに使い分けていたのであろう。

主要参考文献

「秦代出土文字史料の研究」班・齋藤賢・畑野吉則・藤井律之・宮宅潔・宗周太郎・目黒杏子 2018 「岳麓書院所蔵簡《秦律令（壹）》譯注稿その（二）」『東方學報』第 93 冊

袁仲一 2014 『秦兵馬俑的考古發現与研究』文物出版社

秦始皇帝陵博物院 2018 『秦始皇帝陵一号兵馬俑陪葬坑發掘報告 2009～2011』文物出版社

秦始皇兵馬俑博物館・陝西省考古研究所 1998 『秦始皇陵銅車馬發掘報告』文物出版社

秦俑坑考古隊 1980 「秦始皇陵東側馬廐坑鉗探清理簡報」『考古与文物』1980 年第 4 期

睡虎地秦墓竹簡整理小組 編 1990 『睡虎地秦墓竹簡』文物出版社

陝西省考古研究院 2018 「陝西咸陽閻家寨戦国秦遺址、墓葬發掘簡報」『考古与文物』2018 年第 4 期

陝西省考古研究所・始皇陵秦俑坑考古發掘隊 1988 『秦始皇陵兵馬俑坑一号發掘報告 1974～1984』文物出版社

陝西省考古研究所・秦始皇兵馬俑博物館 2006 『秦始皇帝陵園考古報告 2000』文物出版社

插图出典

图 1：袁 2014 より転載

图 2、3：秦始皇兵馬俑博物館・陝西省考古研究所 1998 より転載

图 4：陝西省考古研究所・秦始皇兵馬俑博物館 2006 より筆者加筆修正

图 4：西安市文物保護考古所 2004 『西安南郊秦墓』陝西人民出版社より筆者加筆修正

图 5：咸陽市文物考古研究所 1998 『塔兒坡秦墓』三秦出版社より筆者加筆修正

秦马之实像

菊地 大树

（日本综合研究大学院大学、兰州大学）

前言

秦朝的兴衰与马有着极深的关系，这一点可以从《史记·秦本记》中看出。犬丘（现在的扶风）的非子喜欢马并且擅长马的饲养，因此周孝王让他在渭河和沁水交汇处（现宝鸡地区）大量饲养和繁殖马匹，因为这一功绩，非子还获赠了秦地（现在的天水）。此后，秦人经历了群雄割据的春秋战国时代，最终实现了对东方六国的统一。秦之所以能实现这一目标，与其稳定的马匹生产系统支撑着一支庞大的军队这一点是分不开的，这个可以通过秦始皇兵马俑而窥见一斑。秦人在对马的熟悉、管理与利用等方面都极为先进，这一点无论从历史学还是考古学的研究结果来看都变得越来越清晰。近年来，随着考古研究的显著进步，极有可能为我们呈现出一些新的历史现象，通过这些新的发现，可以使我们更接近秦代马匹的真实具象。

1. 从考古科学的视点来看秦代马的特征

根据《周礼·夏官职方氏》的记载，雍州（主要分布在目前陕西·甘肃一带）是一个适合马匹生产的地区。近年来，根据古代 DNA 分析结果，可以确认从陕西省淳化县的枣树沟脑遗址（西周）出土的马是属于中亚地区特有谱系的马。根据对凤翔县秦公一号大墓（春秋晚期）、凤翔县血池遗址（战国）和甘肃省礼县西山遗址（周）出土马骨的分析结果，可以看到秦代当时在草原地带的东西文化交流中很活跃。而且根据 Sr 同位素分析结果可以看到，其马的来源不仅有来自本地的也有来自周围地区的。而通过古代 DNA 分析使我们不仅对马的血统，还对其毛色、身体特征等有了进一步的确认，结果显示，秦代马匹主要以枣色（bay）、栗色（chestnut）和黑色（black）为主，这也与当时对马的设计颜色相符。另外，从血池遗址出土的幼马牺牲可以看出，秦代当时使用的马匹种类颇为繁多。

2. 战国时代的秦马

2014 年在对西安咸阳国际机场的随工清理发掘时发现了阎家寨遗址，这一遗址除了出土墓葬与建筑遗迹外，还发掘了一处超过 100 个坑的祭祀坑群（陕西省考古研究院 2018）。根据出土的遗物可以推定这是一处战国时代中后期的遗址，其南侧有被认为是秦惠文王之子秦武王的永陵一司马庄秦陵，所以这个祭祀坑群可能是属于永陵的祭祀设施。

祭祀坑自东向西有序排列，每个竖穴坑都陪葬有一匹马。根据 33 个祭祀坑中获取的马匹年龄与性别数据来看，年轻的马占多数，体高为 125—151 厘米，其中大多数在 134 厘米以上。

3. 秦始皇兵马俑坑的马俑与铜车马

秦始皇兵马俑坑中至今已出土了大量的士兵俑和 600 匹左右的马俑。属于一号兵马俑坑的战车马俑（n=17）其平均体高为 131.7 厘米（陕西省考古研究所等 1988），2009—2011 年同坑北部 T23G9 中出土的枣色（栗色毛发）马俑，修复前推定体高为 124—137.6 厘米（秦陵博物馆 2018）。

从二号兵马俑坑出土了一匹附有皮革制的具有缓震作用马鞍的马俑，俑高 133 厘米（袁 2014，图 1）。另外，三号兵马俑坑中出土了尺寸为实物一半的铜车马（图 2、3）。一、二号铜马的体高为 65.2—66.8 厘米，换算成实际尺寸则体高应该为 130.4—133.6 厘米。

4. 秦始皇帝陵中的马

秦始皇陵中除了马俑外，还出土了实际的马匹。在秦始皇陵东的上焦村一带，发现了一组自南向北的马厩坑群。每个马厩坑都配有一个马俑和体高 140—150 厘米的马匹，出土的陶盆或陶钵上分别刻有“左厩”、“宫厩”、“三厩”等官厩名（秦俑考古队 1980）。

2000 年从陵园内城的西南部发现的 K0006 有一个平面呈中字形的陪葬坑（图 4）。在后房的东部和西部发现了大约 20 块马骨头，但是由于雨水的流入，它们没有被保留在原来的位置上（陕西省考古研究所等 2006）。因为覆盖陪葬坑的顶棚塌陷和坑中的埋土，大多数马骨受到了严重破坏，但是所有能够确定性别的马都是雄性，根据关节的损耗程度以及牙齿的磨合状况，估计马的年龄为 10 岁以上。另外，从测量值的比率来看，它与兵马俑的马非常相似。根据部分报告中对肢骨测量值的估算，被埋葬马匹的体高约为 115—154 厘米。因此，K0006 墓葬中的马可能大小不一，从小到大都有。

结语

秦人的发祥地是新石器时代之后最早通过草原地带接受西方文化的地方之一。从这里开始的东西方文化交流历史的开端，可以说是以西汉武帝时期从“大宛国”传来的汗血马为代表，而根据最近的研究结果，这一时期，秦国可能充分利用了这一地利的优势建立了一个马

匹生产系统，甚至在战国时期就可能已经建立了战马所需的一套法规，这一点可以从阎家寨遗址的分析结果中得到确认。

根据云梦睡虎地的秦简“秦律杂抄”记载，对军马的筛选条件是体高必须在5尺8寸以上（睡虎地秦竹简整理小组1990），当时秦代的一尺约为23厘米，所以军马的体高要求为133.4厘米以上。另外，岳麓书院藏的秦简“金布律”中记载，被用作“使役”的马不管雌雄体高必须在5尺5寸（126.5厘米）以上，而且年龄必须在4岁以上（“秦代出土文字史料研究”班2018）。从阎家寨出土的马完全符合以上要求，而秦始皇兵马俑坑中的马俑，则表现了最为理想的军马的样子。马4岁以后是乳牙变成恒牙并且关节发育成熟的时间，所以很明显秦人当时完全是在对马十分熟知的情况下制定的这些规定。但是并不是所有的马匹都满足这些条件。无论是秦国在战国时期到统一时期对马的使用（图5、6），还是从《周礼·夏官校人》来看，当时很可能也存在对“良马”以外的马匹的饲养与管理系统。在当时的战乱期间，对军马的利用形式正从马车向骑兵的方式过渡，为了适应这种变化，熟知马匹的秦人也在根据马的各种实际情况来灵活地使用这些马匹。

主要参考文献

- 秦代出土文字史料研究班：《岳麓书院所藏简《秦律令（壹）》译注稿 其二》，《东方学报》，2018年第93册。
- 袁仲一：《秦兵马俑的考古发现与研究》，文物出版社，2014年。
- 秦始皇帝陵博物院：《秦始皇帝陵一号兵马俑陪葬坑发掘报告2009～2011》，文物出版社，2018年。
- 秦始皇兵马俑博物馆、陕西省考古研究所：《秦始皇陵铜车马发掘报告》，文物出版社，1998年。
- 秦俑坑考古队：《秦始皇陵东侧马厩坑钻探清理简报》，《考古与文物》，1980年第4期。
- 睡虎地秦墓竹简整理小组：《睡虎地秦墓竹简》，文物出版社，1990年。
- 陕西省考古研究院：《陕西咸阳阎家寨战国秦遗址，墓葬发掘简报》，《考古与文物》，2018年第4期。
- 陕西省考古研究所、始皇陵秦俑坑考古发掘队：《秦始皇陵兵马俑坑一号发掘报告1974～1984》，文物出版社，1988年。
- 陕西省考古研究所、秦始皇兵马俑博物馆：《秦始皇帝陵园考古报告2000》，文物出版社，2006年。

插图出典目录

- 图1：袁仲一：《秦兵马俑的考古发现与研究》，文物出版社，2014年。
- 图2、3：秦始皇兵马俑博物馆、陕西省考古研究所：《秦始皇陵铜车马发掘报告》，文物出版社，1998年。
- 图4：陕西省考古研究所、始皇兵马俑博物馆：《秦始皇帝陵园考古报告2000》，文物出版社，2006年；笔者作图。
- 图5：西安市文物保护考古所：《西安南郊秦墓》，陕西人民出版社，2004年；笔者作图。
- 图6：咸阳市文物考古研究所：《塔儿坡秦墓》，三秦出版社，1998年；笔者作图。

（秦小丽译）

The Real Image of the Qin Horses

KIKUCHI Hiroki

(The Graduate University for Advanced Studies, Japan & Lanzhou University, China)

The Qin state had long been skilled in horse breeding and organized a huge army, supported by a stable horse production system, finally unifying the whole country. In recent years, detailed reconstruction has become possible based on the archaeological scientific analysis of the horse remains owned by the Qin state, suggesting that a wide variety of horses were used. The Qin laws described the conditions for the selection of warhorses, and the criteria were consistent with those of the Terracotta Warriors in the imperial mausoleum of the first Qin emperor. The analysis of horse remains excavated at the Yanjiazhai site has made it clear that this standard was already established in the region during the Warring States period, before the establishment of the Qin Dynasty. The analysis of horse remains excavated from the mausoleum of the first Qin emperor also shows the existence of small horses that did not necessarily meet the criteria for being used as warhorses. Although the use of these small horses is not mentioned in the Qin laws, as the use of horses changed from chariot to horseback riding, it is assumed that they were used according to their aptitude.



2017年9月 甘肅省礼県大堡子山遺跡秦公大墓の踏査

(右より角道、飯島)